

戦国時代とは言うものの……
大相撲初場所観戦印象雑記

「今場所の展望は？」と知人から尋ねられたので、初日の印象からこう答えた。

「高安は大関に復帰できず関脇から陥落」「豪栄道は負け越して大関から陥落」「鶴竜は途中休場して横審が苦言」。

二日目まで進んだところで、おおかたの相撲ファンは「いよいよ遠藤のエンジンに火が着いた」と思ったに違いない。鶴竜を沈めた上で白鵬には正攻法で攻め入って見事に尻餅をつかせた。40～50年前の横綱だったら、平幕に負けて尻から落ちたら引退を決意したものだが……。

そしていつぞやの場所のように、「横綱二人が休場」「大関の一人はカド番で風前の灯火」「関脇の一人は先場所大関から陥落したばかり」と冒頭の展望予想に徐々に近づく状況。主役がいなく、次席も誰だかわからない、混沌とした序盤戦が動き始めた。

<1> 賜杯の行方やいかに

9日目、先場所大関から陥落した高安は六つ目の黒星により、大関への復帰は消滅。

12日目、豪栄道は負け越しが決定して、大関からの陥落が決定。高安と同じように、来場所10勝以上すれば復帰は可能であるが、現在の環境を見たらかなり難しい状況にあると考えられる。

最も懸念していた「横綱・大関がいらない」または「横綱・大関が一人ずつしかいない」などの状況が間近に迫ってきたようにうかがえる。そして終盤に入ると平幕の二力士が先頭を走り、大関がその後を追う形になり、賜杯は今場所再入幕の幕尻力士徳勝龍の胸に抱かれることになった。

◆賜杯の行方(幕内力士の成績分布と推移)

	無敗	1敗	2敗	3敗
初日	21名	20名		
2日目	8名	25名	8名	
3日目	6名	15名	<省略>	<省略>
4日目	4名	7名	<省略>	<省略>
5日目	正代・輝・ 照強	貴景勝・北勝富士・ 遠藤・豊山・徳勝龍	朝乃山・御嶽海・炎鵬・碧山・ 栃煌山・東龍・琴奨菊	<省略>
6日目	正代	貴景勝・遠藤・輝・ 豊山・照強・徳勝龍	朝乃山・北勝富士・碧山・東龍・ 栃煌山	<省略>
7日目		貴景勝・正代・遠藤・ 照強・徳勝龍	朝乃山・豊山・隠岐の海・輝・東龍	御嶽海・北勝富士・竜電・ 碧山・佐田の海・琴奨菊・ 魁聖・栃煌山
中日		貴景勝・正代・ 徳勝龍	遠藤・豊山・輝・照強	朝乃山・北勝富士・東龍・ 栃煌山・竜電・魁聖
9日目		正代・徳勝龍	貴景勝・豊山・輝	朝乃山・北勝富士・遠藤・ 竜電・魁聖・栃煌山・照強
10日目		正代・徳勝龍	貴景勝・豊山・輝	北勝富士・栃煌山・照強
11日目		正代・徳勝龍	貴景勝・豊山・輝	北勝富士・照強
12日目		正代・徳勝龍	貴景勝	北勝富士・豊山・輝
13日目		正代・徳勝龍	貴景勝	北勝富士
14日目		徳勝龍	正代	貴景勝・北勝富士
千秋楽		徳勝龍	正代	

<2> 時代は動き始めたか

今場所の成績と年齢を重ね合わせたマトリックスにしてみたら、下表のようになった。

幕内力士は総勢 42 名、内 31 歳～35 歳の力士が 18 名 (43%)、26～30 歳が 14 名 (33%) で、25 歳以下の若手力士は 10 名で 24%にしかならず、ここにも高齢化社会が見えてくる。

ところが 25 歳以下の力士の 70%が勝ち越している反面、31 才以上の力士は 72%が負け越している。

31 歳以上で今場所勝ち越した力士を眺めてみると、優勝した徳勝龍と柝煌山 (9 勝 6 敗) 以外は「辛うじて勝ち越してきた 8 勝 7 敗」という成績。

◆年齢層別成績分布

年令	12 勝以上	11 勝	10 勝	9 勝	8 勝	7 勝	6 勝	5 勝	4 勝以下
25 歳以下		貴景勝 霧馬山	輝 朝乃山	阿武咲	炎鵬 照強	隆の勝		阿炎	明生
26～30 歳	正代	豊山 北勝富士	竜電	遠藤		大栄翔 御嶽海	高安 石浦 千代丸 志摩ノ海 剣翔		琴恵光 琴勇輝 (全休)
31～35 歳	徳勝龍			柝煌山	勢 魁聖 隠岐の海	宝富士 松鳳山 佐田の海 千代大龍 琴奨菊 東龍		豪栄道 妙義龍 柝ノ心 玉鷲	鶴竜 白鵬 碧山

このようなデータを眺めてみても、時代の節目に差し掛かっていることが感じられる。

ここで「新しいヒーロー」を生み出さなければならないのだが、慌てて質の低い製品を作ることなく、じっくり熟成させて「上質な次世代力士」を生み出すことが必要である。

<3> そして今

この文章を書いている時に、ラジオのニュースが「豪栄道引退」と報じていた。

平成 26 年 7 月場所東関脇で 12 勝 3 敗、準優勝の成績で大関昇進が決まったのだが、直前の場所は 8 勝 7 敗で、さらにその前の場所が 12 勝 3 敗で準優勝。関脇在位は長い力士だったが、関脇在位中に 10 勝以上の星を二場所続けたことは一度もない。直前三場所の白星合計だけを取り上げて、協会もマスコミも「大関昇進」を騒ぎ立てた。大関昇進後も 10 勝以上を二場所続けたことは一度しかなく、名関脇ではあるが「大関に昇進させることが良かったのだろうか」の疑問が絶えず頭をもたげてきた。

小結・関脇で好成績を上げようものなら、たちどころに「大関取り」という騒ぎが起きる。先場所あたりから起きている「朝乃山フィーバー」が「気になるが、直前三場所の星数合計だけに議論が集中するのではなく、「安定性の評価」にも目を向けた昇進基準を考えるべきだと思っている。新基準の私案は下記三点。

① 関脇在位三場所以上 ② 直前三場所の成績 ③ 直前六場所の成績

今、新しい大関と新しい横綱の誕生が待ち望まれる状況ではあるが、今こそ新しい昇進基準の誕生が望まれる好機であることを強く主張したい。大関昇進の基準が厳しくなれば、必然的に強い横綱の誕生にも繋がっていくことになる。

以上